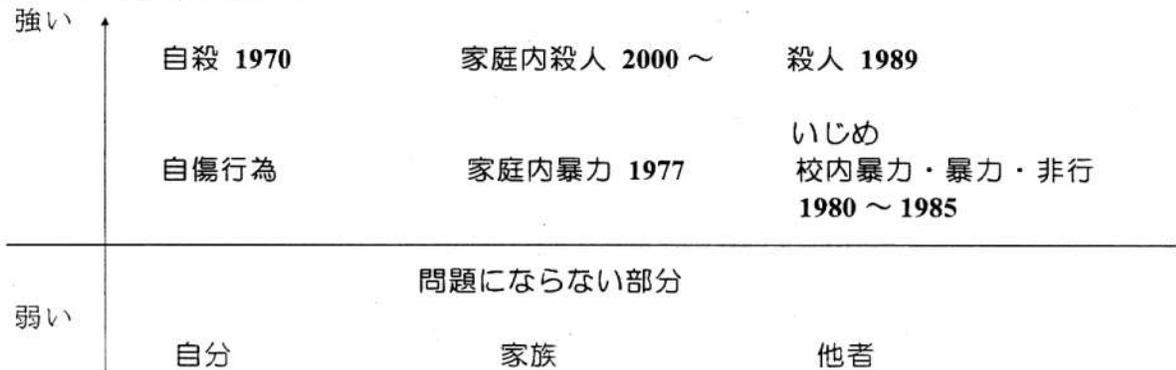


「いじめ問題への対応演習」

研修期日 8月2日(水)

講師 早稲田大学教授 菅野 純 先生

1 子どもの攻撃性について



子どもの攻撃性の発散

学校では攻撃性は生産されているが、発散される場がない。この攻撃性をどうとらえるかが重要である。発散、消化されてプラスに変化されているか。

2 現代のいじめ…根絶は非常に困難だが、減少させることはできる。

(1) いじめの毒

ア 孤立感…誰も自分の味方になってくれないという切実な思い。

イ 無力感…自分の行動をどんなに改めようとも、どんなに抵抗しようともいじめはなくなり、それがさらなるいじめを誘発することに気づいた時に無力感がわき起こってくる。

ウ 不当感…自分はこんなに苦しんでいるのに、自分をいじめている連中は仲間同士で楽しくやっているという境遇の落差を不当に感じる。

エ 不信感…自分を守ってくれないばかりか、自分の受けている心の傷の深さに十分気づくことなく、表面的レベルで問題解決を図ろうとしたり、指導が済んだと思いこんだりしている先生に対して不信感を感じる。

(2) 救済としての仲間入り

いじめる側に入ることによって限りなく加害者に近くなり、いじめの実態が見えにくくなる。その場合いじめの場所が校外に出ていく場合も多い。

3 いじめが生じやすい状況

(1) 閉じられている環境

千年前に書かれた『源氏物語』の中でも、宮中でのいじめの記述がある。また、軍隊内部でも、戦時中疎開した子たちの間にもあった。

(2) 単調な日常

同じ話題が毎日のように繰り返される。

(3) 慢性的ストレス

他者が入ってこない状況で起こることが多い。

教室の状況は上記の3点をほぼ網羅しているのではないか。こんな状況になっていないかチェックしてほしい。体育大会、文化祭などの学校行事は単調さをうち破ることができるし、ストレスマネジメント教育を意識してやっていくこともこれからは大切になるだろう。

4 いじめ指導

最近の子どもは自分の感情を言語化できない。悲しい時は悲しい顔をして、困った時には困った顔をして、そのことを言える子になるような指導が必要である。

(1) 言葉にならない<ことば>

ア うまく言えない<ことば>

つつい反対の言葉を言ってしまう子どもがいる。オウム返しをするとよい。

イ 行動で訴える<ことば>

寂しそうな子がいた。後で分かったが、両親の不和が原因であった。そうならざるを得ない何かがあることを知って敏感になってほしい。

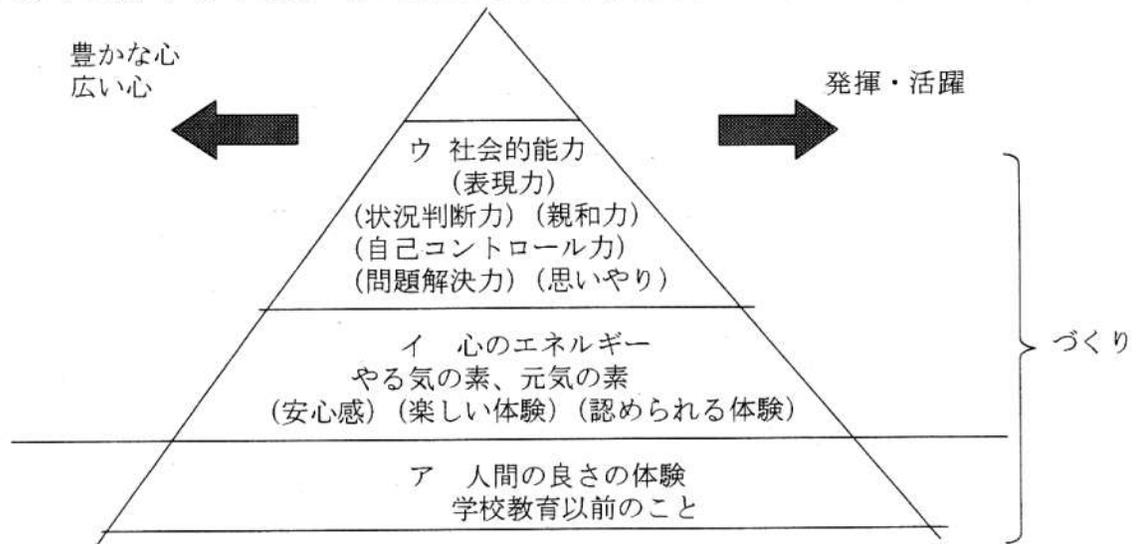
ウ 体で訴える<ことば>

腹痛や不明熱などで訴えている。

エ 夢の<ことば>

不思議な出来事。白昼夢を見ているような出来事。神戸の児童殺傷事件など。

(2) 勁(つよ)い心の育成 心の土台がどれだけ形成されているかが大切である。



※上記のア～ウのどの段階にいるのか見極めて指導することが必要となってくる。上記の表の不足分を補ってやると、いじめを減らすことができる。

ア 人間の良さ体験

「人間っていいな」と思える体験をたくさんしてほしい。「お母さんはいいな。温かいし、抱きしめてくれるし……」「お父さんも……」「先生も……」ほんの少しでもよいから、人間ってよいものと思えるようにかかわってほしい。

イ 心のエネルギー

不安は成長の敵。「どうせ俺なんか」と心の中に×がたくさんついている子どもがいる。少しでも×を○に変えてほしい。×は言葉、評価、まなざしなどで変わってくる。「事象-子ども-大人」の3項関係もあるので、学校にいい思いをしていない親の子どもは、やはり学校にいい感情を抱いていないことが多い。

ウ 社会的能力

昔は、見えない教育があった。しかし、今は家庭や地域の教育力が弱くなった。
放任しておいては身に付かなくなってしまった。

5 ロールプレイングの目的

いじめ問題を臨床心理的な考察やロールプレイングをとおして児童生徒の立場や心情を理解するとともに、その対応策を講じる。

6 ロールプレイングを行うときの留意点

- (1) 誰かが話している時に話を取らないで、耳を傾ける。
- (2) 役になりきり、思い切り演じる。
- (3) 各班ごとに6～7人グループに分かれ、グループ内で発表者A・B・C・D・E・F・(G)を決める。以下、3～6の演習をし、その都度振り返りを行う。

7 演習（イントロダクション）

- 私の学生時代のいじめ体験、または、いじめられ体験を2分ずつ話す。
—互いに話をしたり話を聞いたりして、あなたはどう感じましたか。—

(1) 演習後の感想

- ア いじめられた体験はトラウマとなっていて、どうしても話せない。
イ いじめていたことを話すと嫌な気分になる。
ウ 今になって、自分がいじめをしていたことに気づいた。

(2) 講師のコメント

いじめは被害者の就学時代の思い出を奪ってしまうくらい後を引く問題である。

8 演習（ロールプレイング1）

- いじめを受けていると思われる子に対して、呼び出し面接をする。
・ A…子ども B…先生 その他…観察者
・ Aは、「いじめのことを話したら、またいじめられる」という設定である。
・ ロールプレイング後、1分ずつフィードバックを行う。

(1) 助言

- ・ 呼び出し面接の時は、来てくれたことに対する言葉がけがあるとよい。
- ・ 呼んだ理由を親和的に伝える。ただし、謎かけにならないようにする。
- ・ 声の調子や大きさの調節をしたり、同じ姿勢をとったりしてみるとよい。

(2) いじめへの初期対応について

- ア 被害児の訴えを受けとめる。
イ いじめの実態と構造をつかむ。
ウ 必要に応じて被害児の保護者と面談する。
エ いじめ加害児から事情を聴き、指導的介入を行う。
オ クラス全体にいじめ抑制のための指導的介入を行う。
カ さらなるいじめが生じないように配慮する。

9 演習（ロールプレイング2）

- いじめをしている子に対して、呼び出し面接をする。
(事情を把握して、可能であれば指導を入れる。)
・ A…子ども B…先生 その他…観察者
・ Aは、「できる限り言い訳をする」という設定である。
・ ロールプレイング後、1分ずつフィードバックを行う。

(1) 助言

加害者が複数の場合は、個別に面接を行う。

(2) いじめ加害児童生徒への対応について

ア 「自己責任」について教え、大人の心を刺激する。

イ 「いじめ」という言葉をできるだけ使わずに、「君がもしされたらどうだ」の問いかけなどによって指導する。

ウ 「いじめられる子にも問題があるからといって、いじめてよいということにはならない」ことを指導する。

10 演習(ロールプレイング3)

- いじめを受けている子の父親と母親(または兄)が突然学校にやって来て、担任と面接をする。
- ・ A…先生 B…父親 C…母親(または兄) その他…観察者
- ・ BとCは、「『先生が悪い、学校が悪い』という他罰的な態度で話をする」という設定である。
- ・ ロールプレイング後、1分ずつフィードバックを行う。

(1) 助言

ア 相手が感情的になっている時、同じように感情的にならないようにする。

イ ノートをとったり、復唱したりしながら、相手の話をしっかり聞く。

ウ 複数の来校の時は、必ず全員に話をしてもらう。

エ 結論を急がず、次の日、また次の日と時間をとって対応する。

オ 言われることをまず受けとめてから、言いたいことを伝える。

(2) いじめ問題がトラブルにならないために

ア 普段何事も生じていないときの指導が、いざというときものを言う。

イ 子どもと保護者に対し、いじめに関する教師側の考えを明確に伝えておく。

ウ 担任が一人で抱え込まず、校内に相互で相談する雰囲気がある。

エ 地域との情報交換がスムーズに行われている。

11 演習のまとめ いじめ問題は大人の社会的能力を問われる問題である。

(1) 状況判断が適切か。

(2) 保護者との関係が築けるか。

(3) 解決のレポートリーをたくさんもち合わせているか。

(4) 情報を仲間と共有できるか。(同僚、後輩に伝えられるか。)

12 質疑応答

(質問) ロールプレイング2で、いじめられている生徒と先生に沈黙があってよいか。

(回答) 沈黙の理由を押し量り沈黙を言語化する。それでも沈黙が続く場合は、気持ちを投げかけて終わってよい。

(質問) いじめがあるようだが、それがはっきりしない場合どうすればよいか。

(回答) いじめは巧妙に証拠を残さないように、または無意識のうちに行われることが多い。

事実の追求にこだわりすぎるとこじれてしまうので次のようにする。

・「あなたが同じことをされたらどう思う」と行動のフィードバックをする。

・「△△さんはあなた達によって傷ついています。」「これから同じことがあったら注意します。」と伝える。

13 所感

学校生活の場で「人間っていいな」という体験をさせることの必要性を改めて感じた。面談時の教師の言葉や表情、声のトーンなどの非言語的表現が子ども達に大きく影響を与えていることを改めて痛感した。場合によっては子どもを傷つけることはなかったのか考えさせられた。また、子どもの言葉にならない沈黙の「ことば」をどこまで読み取ることができるか、自己の教育力の向上への取組として今後の課題としたい。また、元気の素、やる気の素である「心のエネルギー」を湧かせたり、子どもの心に丸(○)をつけるような言葉がけや指導ができていたかどうか振り返った。いじめを減らし、いじめに負けないしなやかな心を育てると共に、共に認め合い励まし合える元気でやる気に満ちあふれた子どもの育成のため、家庭、学校、地域が一体となって子どもたちの「心の土台づくり」を支援していきたい。